

児童室の20年

夕陽丘図書館建設計画当初は児童室を設置する予定はありませんでした。当時は子ども文庫運動が盛んで、文庫活動に携わっているお母さん方が、府立図書館が児童サービスを実施することと、文庫への援助を求めて、府への働きかけを始めました。2期目当選直後の黒田知事が夕陽丘図書館開館直後に児童室開室を決めました。新築なったばかりの建物を改造し、1975年5月、1階の隅に広さ90m²、開架冊数5千冊のささやかな児童室がオープンしたのです。

20年の間に着実に児童奉仕のノウハウを蓄積し、蔵書も6万冊に増えました。市町村図書館の支援に役立てようと国内外のレファレンスブックの収集・整備に努め、国内児童書については網羅的に収集し、「なつのはんだな」「あきのはんだな」「大阪府立夕陽丘図書館じどうしつだより・はらっぱ」を毎年刊行し、市町村図書館への情報提供に努めてきました。

当館の蔵書の特色は外国語の絵本の収集です。開館前から収集し始め、毎年コンスタントに購入し続けて来ましたので、今では質量ともに国内有数のコレクションとなっています。特に英米のものはよくそろっています。

和図書も20年の蓄積がものを言い、ようやく、市町村の図書館からあてにされはじめ、府内の図書館はもとより、府外の図書館からも本の貸出やレファレンスの問い合わせが少なくありません。

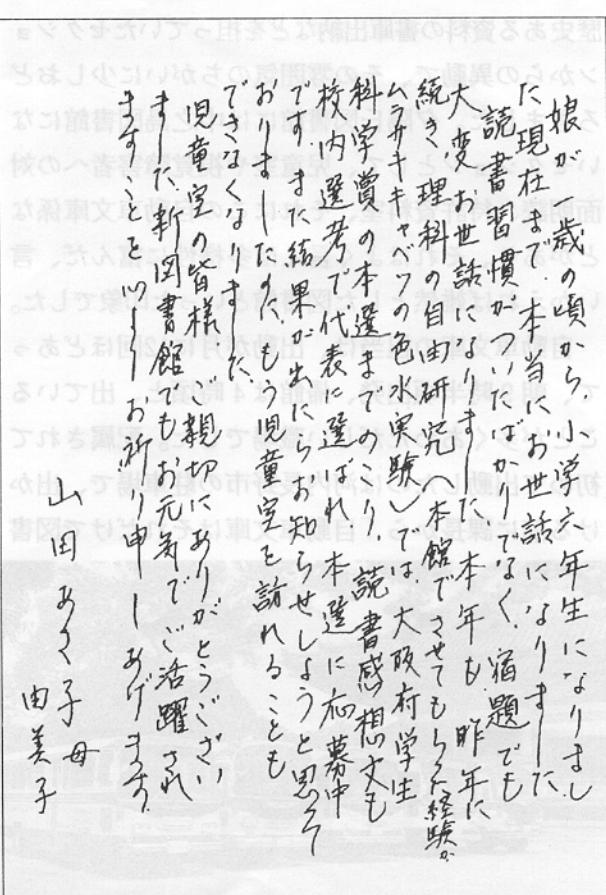
1985年に大阪府立国際児童文学館がオープンしたときには、府立図書館の児童奉仕は必要なくなつたのではないかとも言われましたが、児童文学館は研究機関です。児童文学に対するレファレンス



には答えることができても、府内の図書館サービスの状況の把握や、児童室の運営方法や、児童奉仕の細かい奉仕技術について、児童文学研究者が把握することは困難です。市町村の図書館への支援は府立図書館だからこそできるのです。

というわけで、新図書館ではこども資料室を設け、500m²のスペースに、開架2万5千冊、研究資料コーナーやおはなし室も設け、来館する子どもたちにとっては本との楽しい出会いの場に、市町村の現場の児童図書館員にとっては頼りがいのある存在になることをめざしています。

(脇谷 邦子)



山田
アキラ
由美子
母子